

令和 6 年 6 月 6 日現在

機関番号：11601

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12443

研究課題名（和文）インフォームド・アセスメントに基づく評価基準提示の効果：日本語要約課題を中心に

研究課題名（英文）Effects of Presenting Evaluation Criteria Based on Informed Assessment

研究代表者

高木 修一（Takaki, Shuichi）

福島大学・人間発達文化学類・准教授

研究者番号：20707773

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は英文の要約課題に焦点を当て、評価基準を学習者に提示することによって、フィードバックの機能が向上するかを検証することであった。本目的を直接的に明らかにすることはできなかったが、日本人英語学習者は自身が認識している要約課題の評価基準とパフォーマンスの相関は低かったことを明らかにし、日本人英語学習者は評価基準に沿ったパフォーマンスを行うことは困難である可能性を示した。また、英文要約課題における使用言語の影響についても検証を行い、要約時に使用する言語によって評価基準の困難度が大きく異なることも明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究から日本人英語学習者が評価基準を認識していたとしても、その評価基準に従ってパフォーマンスを発揮できない可能性が示された。そのため、学習者に評価基準と点数を与えるだけではフィードバックが有効に機能しない可能性があり、学習者にフィードバックの活用可能性を促す支援が必要であると考えられる。従来の研究においてはフィードバックとして与える情報に焦点が当てられていたが、学習者のフィードバックの活用可能性という観点により重要であることが示されたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to investigate whether providing learners with evaluation criteria enhances the effectiveness of feedback on a summarization task. Although the study did not directly achieve this objective, it revealed a low correlation between the evaluation criteria recognized by Japanese English learners and their performance. This finding suggests that Japanese English learners may find it challenging to perform according to the given evaluation criteria. Additionally, the study examined the impact of the language used in the English text summarization task, revealing significant differences in the difficulty level of the evaluation criteria depending on the language used for summarization.

研究分野：英語教育学

キーワード：フィードバック インフォームド・アセスメント 要約課題

1. 研究開始当初の背景

教育評価には様々な目的があるが、少なくとも教育現場におけるテストにおいて、正確な測定および学習を促すフィードバックは必要不可欠である。しかし、従来の研究においては、測定の正確さに重点が置かれることが多く、学習者への有益な波及効果を中心に据えた研究は依然として多くはなかった。教育心理学の分野で提案されたインフォームド・アセスメントは、この問題を解決する一助になると考えられる。インフォームド・アセスメントとは、「評価の目的や基準に関して、実施者と受け手との間にしっかりとした知識の伝達・合意がなされているような評価のあり方」を指す(村山, 2006, pp. 271-272)。鈴木(2011)は、インフォームド・アセスメントの一環として、中学校2年生の数学の授業を事例とし、評価基準の提示による効果を検証した。その結果、テストの評価基準の提示によって、学習者の内発的動機づけおよびテスト成績への正の効果があったことが示されている。このように、学習者への評価基準の提示はテストの意義や役割に関する認識を高め、学習者のパフォーマンスを向上させることが示されている。

また、現行の学習指導要領において技能統合型の言語活動が重視されているが、技能統合型タスクでは一定水準の受容技能が前提とされ、最終的な言語産出に重点が置かれることが多い。しかし、必ずしも全ての学習者にとって前提となる授業技能が満たされているとは限らないにも関わらず、受容技能に対する評価やフィードバックは十分ではない。そこで、本研究ではリーディングとライティングの技能統合型ライティングタスクである英文の英語要約課題を視野に入れ、英文の日本語要約課題に焦点を当てる。日本語要約課題は学習者に英語ライティング能力を要求しないため、英語要約課題の基礎となる受容能力のリーディング能力に対して詳細なフィードバックを与えることが可能であると考えられる。

2. 研究の目的

研究開始当初の目的としては、インフォームド・アセスメントに基づく評価基準の提示は、日本人大学生の日本語要約課題のパフォーマンスを短期的そして長期的に向上させるのに貢献するかを検証することであった。しかしながら、コロナ禍に伴って実験研究を予定通り行うことができず、コロナ禍に伴う2年間の延長を含めた6年間で遂行可能な研究に方向転換を行った。本報告書では、方向転換後の研究の一部を報告する。

当該研究の目的は、英文要約課題における使用言語の選択がパフォーマンスに与える影響を検証することであった。研究背景でも述べたように、英語要約課題は技能統合型タスクとして広く用いられているが、受容技能及び産出技能を含めた複雑なプロセスが含まれている。そこで、リーディングおよびライティング時に使用する言語の選択がパフォーマンスに与える影響を検証することによって、当該課題を遂行するにあたっての問題点を検討した。

3. 研究の方法

実験協力者は67名の日本人大学生であった。実験材料として、文章要約課題として英検2級の読解セクションで用いられていた3つの文章(日本語および英語)を用いた。文章要約課題は読解および要約で使用する言語の組み合わせとして以下の3種類を設定した: 読解および要約を日本語で行う(JJ条件)、読解を英語で行い要約を日本語で行う(EJ条件)、そして読解および要約を英語で行う(EE条件)。要約課題の各条件の制限時間と文字数はそれぞれ15分200字、30分200字、そして35分120語であった。また、英語読解熟達度テストとして英検2級の語彙および読解セクションを用いた。協力者は英語読解熟達度テストを受け、その後別の日に文章要約課題に取り組んだ。

文章要約課題の採点については、高校または大学で英語を教える3名の評価者がYamanishi et al.(2019)およびYu(2008)のルーブリックに基づいて評価を行った。これらのルーブリックは、メインアイデア、パラフレーズ、一貫性、そして総合評価の4観点であった。3名の評価者がデータの30%を独立して評価を行った後、評価者トレーニングとしてディスカッションを行い、その後、最初に評価した30%も含めて協力者全員を独立して評価を行った。英語熟達度テストについては、各項目について正答であれば1点、不正答であれば0点とし、合計得点を英語熟達度得点として算出した。

文章要約課題については、協力者、評価者、条件そして評価基準の4つの相による多相ラッシュモデルを行った。また、受験者と条件、条件と評価基準についてバイアス分析を行い、各条件における受験者の能力および評価基準の難易度を推定するためにabsolute measureを算出した。さらに、3つの条件における受験者の能力と英語読解熟達度と相関分析を行った。

4. 研究成果

多相ラッシュモデルのwright map が図1である。unexpected responses の割合や一次元性などのモデル指標から判断して、今回の多相ラッシュモデルの結果は適切に収束していると判断した。

各相の推定値などを算出したところ、まず、受験者については、おおむね他の相と対応している受験者が多いが、やや能力が高い受験生などが部分的にいることが分かった。

条件については、JJ 条件、EJ 条件そして EE 条件の順に困難度が高くなった。この結果については、第二言語 (L2) である英語で行う活動が増えるほど困難度が高くなっていることを示しており、想定通りの結果であった。

次に、評価基準については、メインアイデアが最も易しく、総合評価と一貫性が同程度、そしてパラフレーズが最も困難であった。この結果については、バイアス分析を通して産出された absolute measure を用いて、条件間における評価基準の困難度の違いを検討した。

各条件における評価基準の absolute measures は図2の通りである。まず、JJ 条件においては、メインアイデアが最も困難度が高かった。次に、EJ 条件においては、パラフレーズが最も困難度が低かった。その一方で、EE 条件においては、パラフレーズが最も困難度が高いという結果であった。まず、EE 条件の結果については、L2 学習者は要約を作成する際に元の文章の表現をコピーする傾向があるため (e.g., Keck, 2014)、英語で読んだ文章を英語の別の表現を用いて再構築することが難しくなった可能性がある。それに対して、EJ 条件では元の文章を和訳する過程で異なる語彙や文構造を使用することが可能になるため、パラフレーズが最も容易であった可能性がある。

最後に、各条件によって推定された受験者能力の absolute measures と英語読解熟達度の相関は図3の通りである。

図1 多相ラッシュモデルのwright map

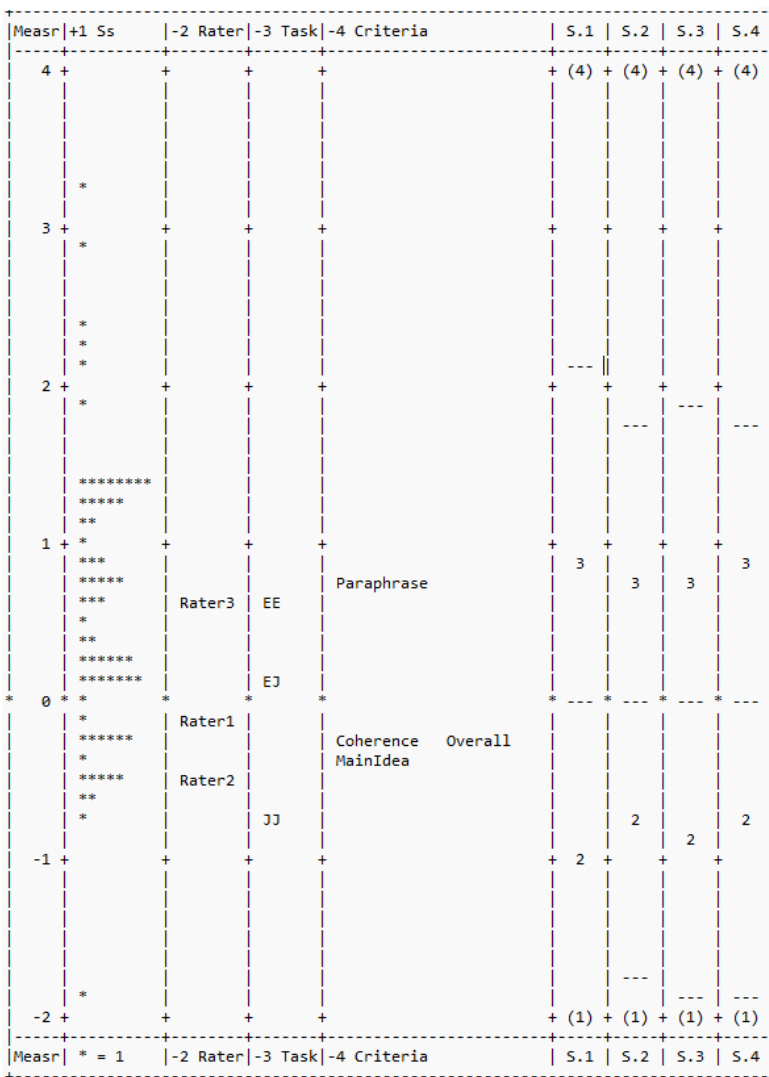
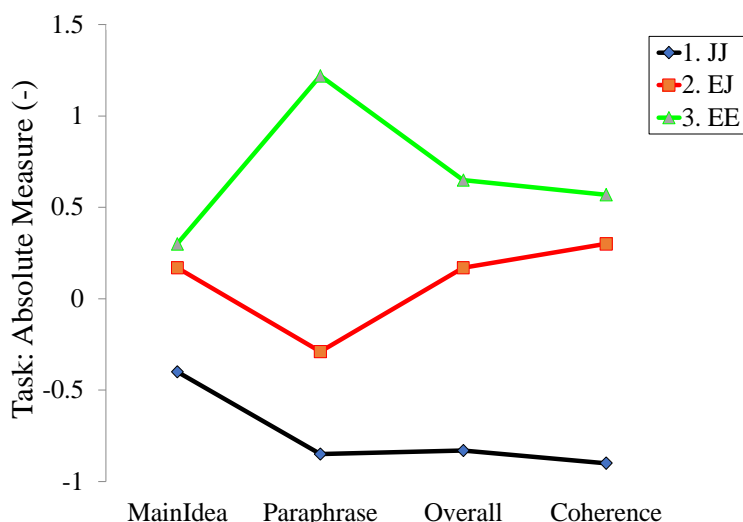


図2

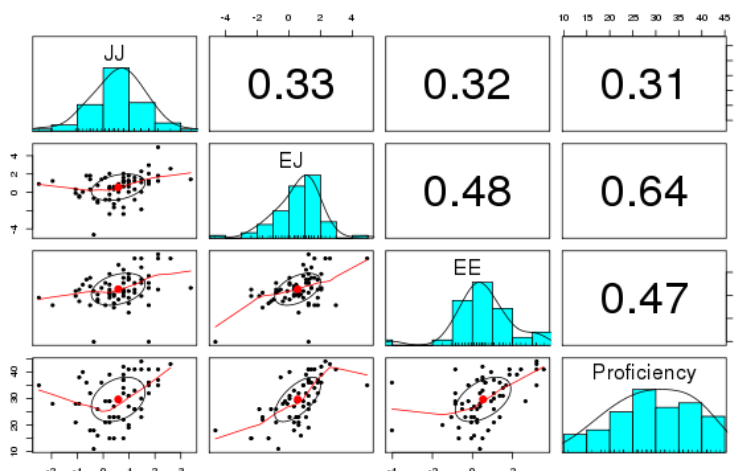
各条件における評価基準の困難度の absolute measures



相関分析の結果、各条件間の absolute measures の相関係数は低い～中程度であった。このことから、各条件間で受験者に要求していた能力には違いがあることがわかる。また、英語読解熟達度得点と相関については、読解でのみ英語使用が求められる EJ 条件が最も高く、次いで読解と要約で英語使用が求められる EE 条件、そして、英語使用がなかった JJ 条件が最も低かった。このことから、今回の実験で設定された各条件では、想定されていたような言語使用が要求されていたものと考えられる。

図 3

各条件における受験者能力の absolute measures と読解熟達度得点との相関



< 引用文献 >

Keck, C. (2014). Copying, paraphrasing, and academic writing development: A re-examination of L1 and L2 summarization practices, *Journal of Second Language Writing*, 25, 4–22.

村山航. (2006). 「テストへの適応 教育実践上の問題点と解決のための視点」. 『教育心理学研究』. 第 54 巻 2 号, 265–279. https://doi.org/10.5926/jjep1953.54.2_265

鈴木雅之. (2012). 「教師のテスト運用方法と学習者のテスト観の関連 インフォームドアセスメントとテスト内容に着目して」. 『教育心理学研究』. 第 60 巻 3 号, 272–284. <https://doi.org/10.5926/jjep.60.272>

Yamanishi, H., Ono, M., & Hijikata, Y. (2019). Developing a scoring rubric for L2 summary writing: A hybrid approach combining analytic and holistic assessment. *Language Testing in Asia*, 9, Article 13. <https://doi.org/10.1186/s40468-019-0087-6>

Yu, G. (2008). Reading to summarize in English and Chinese: A tale of two languages? *Language Testing*, 25, 521–551. <https://doi.org/10.1177/0265532208094275>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Takaki, S., & Kubota, K.	4. 巻 41
2. 論文標題 Relationship Between Perception and Performance on an L1 Summary Writing Task of an L2 Text: A Case Study of Japanese EFL University Students	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東北英語教育学会研究紀要	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高木修一・久保田恵佑・横内裕一郎	4. 巻 41
2. 論文標題 東北英語教育学会研究紀要22-40号掲載論文におけるテーマおよび研究デザインの系統的レビュー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東北英語教育学会研究紀要（TELES Journal）	6. 最初と最後の頁 33-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小泉利恵・高木修一・久保田恵佑	4. 巻 2022年8月号別冊
2. 論文標題 高校における「知識・技能」, 「思考・判断・表現」, 「主体的に学習に取り組む態度」の学習評価	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 2022年8月別冊『英語教育』新課程対応 テスト・評価のアップデートマニュアル	6. 最初と最後の頁 26-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 高木修一
2. 発表標題 観点別学習状況の評価と言語能力の評価 リーディング研究の知見から
3. 学会等名 全国英語教育学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高木修一
2. 発表標題 読解メカニズムと「読むこと」の診断的評価
3. 学会等名 小学校英語教育学会（JES） 青森・秋田・宮城・福島合同セミナー
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Takaki, S.
2. 発表標題 A Comparison Between Summary Writing Performance in Different Languages Among Japanese EFL Learners: Effects of Language Use for Reading and Writing
3. 学会等名 9th Annual International Conference of the Asian Association for Language Assessment (AALA) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 高木修一
2. 発表標題 学習のための評価を実現する視点：全国学力・学習状況調査をもとに
3. 学会等名 英語授業研究学会 関西支部第34回秋季研究大会（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 平井明代	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東京図書	5. 総ページ数 320
3. 書名 教育・心理・言語系研究のためのデータ分析－研究の幅を広げる統計手法－	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------